

プロGRESSレポート2020-2023

ジオパーク名：

浅間山北麓ジオパーク

報告責任者：

浅間山ジオパーク推進協議会 事務局長 宮崎 貴

A. 一般情報

| | |
|---------------------|--|
| 面積 km ² | 286km ² |
| 人口 | 12,065 人 (2024 年 7 月 1 日現在) |
| 日本ジオパークとして認定された年 | 2016 年 |
| 前回の現地審査日と前回審査員の名前 | 2020 年 10 月 26 日～28 日 斎藤 清一、鈴木 雄介、大野 希一 (オンライン) |
| 連絡先 (氏名、職務上の肩書、メール) | 宮崎 貴 浅間山ジオパーク推進協議会 事務局長 takasi-mh@vill.tsumagoi.lg.jp |
| ウェブサイト (URL を記載) | https://mtasama.com/ |
| ソーシャルメディア (すべて列記) | フェイスブック： https://www.facebook.com/asamageopark/ X： https://x.com/officialMtAsama |

執筆者：

古川 広樹 (浅間山ジオパーク推進協議会事務局) : E.1.3 を除く

本多 力斗 (浅間山ジオパーク推進協議会事務局) : E.1.3

B. 提出書類一覧

1. プロGRESSレポート 2020-2023
2. 自己評価表 A 日本語
3. プロGRESSレポート 2020-2023 資料
4. 自己評価表 2020-2023 資料

C. エリアの一体性



浅間山北麓ジオパークは、活火山である浅間山及び烏帽子火山群の活動によって形作られた地形と景観及び過去に火山泥流が流下した吾妻川流域を中心として構成される火山のジオパークである。

エリアは、浅間山の火口から吾妻川にかけて分布する火山性堆積物の一体性を示している。

浅間山及び烏帽子火山群は群馬県と長野県にまたがり、その稜線が県境を成している。エリアは群馬県内にあり、嬭恋村の吾妻川より右岸の地域、及び長野原町全域で構成される。

D. 前回の指摘事項に関する取組・改善点

前回の審査結果：再認定

I. 緊急に解決すべき課題（おおむね1年以内）

1. ジオパークネットワークへの積極的参加：浅間山北麓ジオパークの優れた活動（運営委員会を中心とした活動の展開など）をネットワーク内で共有するとともに、ジオパークというプログラムが目指す理念や、JGN 等で議論されているジオパークの最新動向や審査基準を地域へフィードバックしてほしい。

ネットワーク活動については、当ジオパークで定着、進展しているガイドツーリズムを生かした発信を考え、2022年に「人と大地の物語を伝えるガイドツーリズム」をテーマに関連ブロック大会を主催した（資料 D.1）。大会では、第6回日本ジオパーク全国大会（霧島

大会) で発表された「私たちが目指すガイド像 2015 in 霧島」を踏まえ、「自分の地域だけではなく地球全体を伝えるには？」など、目指すガイド像の地域適用を議論した(写真 D.1-1)。また、参加者へのメッセージとして、大会テーマをチャートモデルにまとめた『ジオパークの「宝」と持続可能な社会のための「行動」をつなぐ「伝える力」』を発表した(資料 D.1-2)。



写真 D.1

同年、日本ジオパークネットワーク(JGN) 自然災害伝承碑登録推進ワーキンググループに参加、

第 12 回日本ジオパーク全国大会(白山手取川大会)の分科会で、浅間山天明噴火に関連する自然災害伝承碑の登録状況を報告し、天明噴火発生から現在まで 240 年にわたり続けている災害伝承を支えている力について分析した(資料 D.1-3)。

2023 年の日本ジオパーク全国大会では、小さなジオパーク地域でも開催可能な大会モデルの構築を目指し、関東ブロックで会場を分散、共同開催する方式をとった。当ジオパークは「フェノロジー(生物季節)と地域風土」をトピックとする分科会の企画運営を担当した。フェノロジーカレンダーは、地域の魅力を伝え、環境変動の影響を知ることができる親しみやすいツールであり、住民が声を出し合いながら作ることができる。この分科会は、後に JGN 内に「気候変動ワーキンググループ」が誕生するきっかけとなった。大会報告書の作成では、大会宣言の起草を務めた(資料 D.1-4)。

(上記の内容は、E.8「ネットワーク活動」でも扱う)

ジオパークの大会や研修会などに参加する運営委員には旅費と参加費を補助し、参加レポートの提出を依頼しているほか、ガイド養成講座では受講者の理解促進のため「ジオ検定」(資料 D.1-6)を実施している。

参加した大会や研修会などについてはレポートにまとめており、日本ジオパーク委員会(JGC)が主催する研修会、審査基準検討会の傍聴、JGC のウェブサイト公開されている会議議事録等から得た情報は、運営委員会で報告と説明を行なっている。

2. ジオパーク活動に関わる担当者や組織(特に運営委員)が、ユネスコ世界ジオパークが目指す理念をきちんと理解し、普及する。

ユネスコ世界ジオパークのリーフレットの内容は運営委員に周知しており、ユネスコのプログラムであるジオパークは SDGs と関連性があることや、地球科学から社会的関心事まで、幅広いトピックスを扱うプログラムであることを再確認している。ガイド養成講座でも受講者にリーフレットを配布し、説明の時間を設けている。

ジオパーク活動がどのようなものを分かりやすく普及するための資料として「ジオパークの活動」を考案した(写真 D.2 及び資料 D.1-5)。資料では、ジオパーク活動は「いのちの土台である大地をたたえ、人間と自然の心地よい関係をつくることを目指す活動」と説明している。また、当ジオパークには、火山と人間の関わりによってできた大切な地域資源として、(1)火山活動によってつくられたなだらかな高原地形を基盤とする人びとの暮らし；(2)美しい景観・温泉・爽やかな気候によって育まれる避暑地・リゾート文化；(3)火山災害



写真 D.2

の被災・復興経験とその記録；を「浅間山北麓ジオパークにある3つの宝」として紹介、ジオパークではこれらの宝を今に生かし、未来につなぐために活動していることを伝えている。これを下敷きとして、当ジオパークの総合パンフレットを、よりジオパークの理解普及に役立つものに改訂する作業が運営委員会で進められている。

3. サイトリストのアップデート：古い基準でのリストとなっているため、再整理すること。「エリア」などの取り扱いについても注意すること。

新しい基準に沿ってサイトリストを再整理した。八ッ^{やん}場^ばダムのバックウォーターである「F6 八ッ場あがつま湖」は、文化サイトに位置づけた（資料 D.1-7）。また、広大なキャベツ畑を背景にこんもりと茂るカラマツの木立がフォトジェニックな風景として取り上げられる機会が多い「カラマツの丘」（写真 D.3）などを、新しく眺望ポイントに設定することを検討している。



写真 D.3 カラマツの丘

リストには、私有地内にあるもの（C6 古瀧）や立入禁止の場所にあるもの（B2 吾妻火砕流）、アクセスのための整備された道がないもの（E6 古孀恋湖）などが含まれる。すべてのサイトに解説板の設置が必要か、一般利用者向けのパンフレットにどこまで記載すべきか、サイトリストと一般利用の関係整理についての議論が継続中である。

「エリア」などの用語・用法については、日本ジオパーク委員会やネットワークが主催する研修会への参加、審査基準検討会での傍聴などを通して理解と確認をしてきたところである。

II. できるだけ早く解決すべき課題（おおむね2年以内）

4. マスタープランおよびアクションプランの改定：ジオパークというプログラムを使って、浅間山北麓地域をどのような姿にしていきたいのかというビジョンを示すとともに、「誰」が「何」を「いつまで」に実行するのかを明記した、浅間山北麓ジオパークとしてのマスタープラン、アクションプランを策定してほしい。

2021年5月にマスタープラン「基本計画 2021-2025」（資料 D.2-1）、9月にアクションプラン「行動計画 2022-2025」（資料 D.2-2）を改定、内容を大幅に刷新した。マスタープランには、(1) 火山地帯に適応したくらしの先進モデルを実証的に探求する；(2) 自然とふれあい、知的探究心を育むリゾート文化を追求する；(3) 浅間山全体の持続可能な利用を推進する；の3つのビジョンを掲げ、保全活用プログラムの基本的な考え方を示した。アクションプランは、(1) 地質遺産の保全；(2) 教育普及；(3) 防災・減災啓発；(4) 自然享受とツーリズム；(5) イメージと情報発信；(6) コミュニティとネットワーク；(7) くらしと産業；(8) 管理運営；の8つの領域ごとに目標とその道筋を示した。

両プランは当ジオパークのウェブサイト上に公開している。

5. 施設間の連携強化：各施設には、共通の展示物やパネルを設置するなど、情報発信の連携を強化させ、地域周遊を促してほしい。新設される「やんば天明泥流ミュージアム」は本ジオパークの大きな見どころである天明噴火に関する施設でもあることから、ジオパークの重要な拠点施設として展示等を充実させてほしい。

エリア周遊を促すため、ジオパークのサイトが持つ意味や価値を自ら調べて発見するセルフガイドシートを作成（写真 D.5-1）、拠点施設とビジターセンターに設置した。



写真 D.5-1



写真 D.5-2

2021年に完成した「やんば天明泥流ミュージアム」では、敷地内に移設保存された木造校舎が、ジオパークコーナーとして活用されている（写真 D.5-

2）。学芸員と相談しながら「ジオパークの活動」パネルを作成・展示をするなど、ジオパークの普及を進めており、2024年から始まる JGN 事業「地球時間の旅」巡回展への参加も決定している。

また、天明噴火で流れ下った溶岩や土石なだれ、火山泥流を追いかけるように巡り、同ミュージアムが着地点となるツアーを地域づくり団体と協働して企画、2024年に実施した。

同ミュージアムのガイド組織にはジオパークの認定ガイドも重複して関わり、発掘調査で出土した搾油器を復元して実際に油を搾ってみるなど、発掘成果を活用した体験プログラムが創出されつつある。

III. 中長期的に解決すべき事項

6. 地球科学専門家不在の状況を改善：現状では、分野の異なる専門家の努力や元教員の参加、大学等の連携により、ジオパークの学術的品質を維持している。浅間山では多くの調査研究が行われており、最新の成果をジオパーク活動にわかりやすく取り入れていくため、専門家の雇用も含め、地球科学専門家不在の状況を改善する努力をしてほしい。

各種研究発表の場への参加、気象庁・国土交通省・大学・各学会などへの協力を通して研究者・専門家にリーチしているが、慢性的な人材不足に加え、待遇面での予算確保や研究環境の整備など困難な課題を抱えており、常勤の地球科学専門家不在の状況が継続している。

学術的品質の維持に関しては、浅間山を研究フィールドとする火山や土壌の研究者がおり、調査・巡検・研修などで協力関係を築いている。また、エリア内の博物展示施設の館長が新たに学識委員に加わり、2023年の日本ジオパーク全国大会（銚子・秩父大会）の分科会で講演をしているほか、近隣地域で活動している火山災害の研究者とジオパークの普及講演を共同で行う（資料 D.3-1）など協力関係の進展がある。

2023年の活火山法改正に「火山の専門家の育成及び継続的な確保等」が盛り込まれたこと、地元の群馬大学のカリキュラムにジオパークが扱われるようになったことなどを追い風にして、引き続き学術的品質の維持と人材確保に向けた努力を継続していく考えである。

7. ESD・防災教育の推進：浸透してきている教育活動に ESD の視点を取り入れ、地域内の資源を活用して、あらゆる視点から地域の地球環境を考えていけるような教育の形を模索してほしい。火山防災に関する教育は、すでに地域に存在する浅間山火山防災協議会との取り組みを活用し、活火山地域の手本となるような活動としてほしい。

2021年にホスト開催した「火山砂防フォーラム」では、地域の中学生に火山との共生を考えてもらうため、国土交通省利根川水系砂防事務所と協力して自然学習と防災学習を統合

したプログラムを実施した。当ジオパークがスカイロックトレイルと浅間山溶岩樹型での火山学習を、砂防事務所職員が浅間山での火山噴火緊急減災対策事業の必要性や効果の説明と砂防施設見学などの防災学習を担当した。

同年、浅間山に国内初となる火山観測所が設置された日にちなみ、8月26日が「火山防災の日」に制定された。当ジオパークでは同日に火山防災ワークショップを実施、浅間山2004年噴火を振り返った。会場にはその時の火山噴出物の実物を展示、火口からの距離に応じて噴出物の大きさがどのように変化するかを見てもらった。参加者からは、「雨どいに溜まった火山灰を掃除せずにいたら腐食して穴が開いた」「別荘地に住んでいるが防災無線が聞こえなかった。今は無線を受信するラジオがある」など当時の経験が語られた。

同年12月には、火山防災をテーマにフォーラムを開催した。山梨県富士山科学研究所からコーディネーターを、気象庁浅間山火山防災連絡事務所から講師をそれぞれ招いて、講演とディスカッションを行い、災害時の避難所にもなっている会場の機能を生かして備蓄物資の展示や炊き出しの演習を行なった。対話を通して、「国内初となる火山観測所が浅間山に設置されたのは、天明噴火がもたらした悲劇が大きく影響している」「浅間山がどのような山なのかを知り、伝えていくためには、ジオパークで情報を集め利用できるようにしておくことが大切」との声が出た。

フォーラムでは、土砂災害・砂防の専門家より以下の3つの提言が述べられた。

1. 現在始められているスカイロックトレイルを発展させるなど、「麓から火口への道」を活用した「火山を知るシステム」を作り、浅間山の素晴らしさを内外に伝えるための仕組みとして、ジオパークガイドを発展的に育成する。なお、ジオパークガイドは、「天明噴火の語り部」とともに、「現代の浅間山の語り部」として、その役割を積極的に果たされることを期待する。
2. 「火山を知るシステム」にジュニア部門を作り、地元の小・中学生及び高校生に、浅間山学習や登山を実施し、地域を支える人材を育成する。
3. 火山ツアーを実施していく際の安全を判定する仕組みを構築する。

これらの提言を踏まえて、教育旅行や火山防災プログラムをコーディネートできるチーフガイドの育成及び高校と連携したプログラムを進めている。

(上記の内容は、E.2.4「気候変動および自然災害への関わり」でも扱う)

8. 浅間石の採取について：浅間石の採取について、地権者等に対する啓発活動を継続するとともに、より持続的で適正な利用の在り方を考え続けてほしい。

浅間石については、(1) 独特の景観を形作っているもの；(2) 珍しい現象が起きたことを示す証拠となるもの；(3) 地域から大切にされているもの；(4) 教育やツーリズムに活用が期待できるもの；を大地の遺産として保全していく方針である。

2021年から保全のための基礎資料を得ることを目的として浅間石の分布調査を開始、これまでに276地点の岩塊の大きさ・形質・外観写真・位置情報を記録している。運営委員会では、上記の方針に沿って保全の必要性を啓発するための資料「大地の記憶を語り 独特の景観をつくり出している浅間岩」の作成に取り組んでおり(資料D.3-2)、地権者への説明や外部に向けた発信を進めている。

(上記の内容は、E.9「地質鉱物資源の販売」でも扱う)

E. ユネスコ世界ジオパーク基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

地質学的特徴と価値

浅間山北麓ジオパークは、活火山である浅間山及び烏帽子火山群の活動によって形作られた地形・景観と、過去に火山泥流が流下した吾妻川流域を中心として構成される火山のジオパークである。

浅間山は、我が国で最も活動的な活火山の一つであり、爆発的な噴火を繰り返してきた。

1783年に発生した大規模噴火で埋没し、住民の84%を失った鎌原村（現在の嬭恋村鎌原）は、「日本のポンペイ」と呼ばれ、災害の発生から今日に至るまで240年以上にわたり、地域住民が、被災者の供養とともに災害と復興の歴史を語り継いでいる。

火山の活動は、災害をもたらしながらも地域の暮らしの基盤形成に深く関わり、なだらかな高原地形と火山性土壌である黒ボク土を利用して高原野菜が栽培され、国内の一大産地になっているほか、火山がつくり出す独特の景観や温泉、夏の爽やかな気候は、この地の高原リゾート文化の形成に大きな役割を果たしている。

日本で最初に火山観測所が設置され、噴火予知に優れた実績を有し、火山と共生していく営みが続けられている地域である。

地質サイトの保全

1) 法的保護

20ある地質サイトのうち15サイト（75%）が、自然公園法・森林法・河川法により、土石の持ち出し、地形改変などが規制されている。

| | | |
|--------------|-------------------|---|
| 自然公園法（11） | 特別保護地区（3） | A1 千トン岩、A2 トーミの頭、A3 シラハゲ |
| | 第1種特別地域（5） | B1 鬼押し溶岩、B2 吾妻火砕流、B5 上の舞台溶岩、B6 下の舞台溶岩・黒豆河原溶岩、B7 六里ヶ原の火山荒原 |
| | 第3種特別地域（1） | D4 たまだれの滝 |
| | 普通地域（2） | A4 トーミ断層、D6 烏帽子・浅間火山群 |
| 文化財保護法・条例（2） | B3 浅間山溶岩樹型、F5 吾妻峡 | |
| 森林法（1） | F4 丸岩 | |
| 河川法（1） | C1 浅間大滝・魚止めの滝 | |

2) 保全活動団体と連携

「B3 浅間山溶岩樹型」（国特別天然記念物）については、保全活動をしている団体がある。団体の構成員はジオパークの運営委員として参画しており、樹型のメンテナンス、普及啓発のための見学会の開催など、連携した活動を行なっている。

3) サイトパトロール

従来から行われていたサイト安全点検を 2022 年よりサイトパトロールとして実施、年 2 回、サイトと解説板の状況確認をしている。自主的なパトロールやサイトをガイドした際には、点検記録票（資料 E.1-1）により、状況を随時報告できるようにしている。

4) 利用条件の設定

「B1 鬼押し溶岩」「B5 上の舞台溶岩」「B6 下の舞台溶岩・黒豆河原溶」「B7 六里ヶ原の火山荒原」を含むスカイロックトレイルの利用は、ジオパークが認定したガイドの同行を条件としている（資料 E.1-2）。

5) 保全合意書の取り交わし

「C5 流れ山」の一部では、保全合意書（資料 E.1-3）が取り交わされている。

サイトの保全状況は、サイトカルテにより管理している（自己評価表資料 iC.3,4,7）。

新しいサイト

該当なし。

E.1.2 境界線

浅間山北麓ジオパークは、活動度の高い活火山として知られる浅間山および烏帽子火山群の活動によって形作られた地形と景観を中心として構成されるジオパークである。

エリアは、浅間山の火口から吾妻川にかけて分布する火山性堆積物の一体性を示しており、境界線には行政界と河川を用いている。

拠点施設となるジオパーク総合インフォメーションセンター（嬭恋村地域交流センター内）では、インフォメーションボード（写真 E.1-1）、インフォメーションディスプレイに境界線を表示している。また、パンフレット、エリアマップ、ウェブサイトなどのメディアにもエリアの境界線を表示している。



写真 E.1-1

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

主要な道路沿い 8 箇所にエリアの入口を示すエントランスサイン（英語併記）を設置している（写真 E.1-2）。サインは景観に配慮した配色を採用している。

エリアとサイトの情報看板は、サブエリア案内板 6 か所、サイト解説板 22 か所、複合解説板 2 か所（すべて英語併記）を整備している。また、既設看板へのサイト表示 2 か所を行なっている。

駅前、観光施設、道沿いなど 9 か所にのぼりや横断幕を展開（写真 E.1-3）、拠点施設とビジターセンター 8 か所にロゴを表示しているほか、行政広報誌にジオパークのロゴや特集記事を掲載している。



写真 E.1-2

各拠点施設とビジターセンターでは、共通した情報を提供するため、総合パンフレット、ジオマップ、セルフガイドシート、季刊広報誌「あさまびと」最新号の 4 点を設置している。

また、ウェブサイトを一刷新し、災害に関する情報、ガイドの紹介、ツアーやモデルコースなど、利用者の関心が高い情報へのアクセスのしやすさを改善した。フェイスブックのフォロワーは 1690 人で、前回審査時から約 2 倍に伸びている。

E.1.4 施設・インフラ整備

2021 年に博物展示施設「やんば天明泥流ミュージアム」が完成（写真 E.1-4）、八ッ場ダム建設に伴う 26 年に及ぶ発掘成果の一般公開が開始された。

2022 年に拠点施設である地域交流センターの増築を行い、180m²の多目的スペースと地域産品の活用を進めるために共同加工場を整備した。加工場では、じゃがいもからデンプンを採った残渣を凍結乾燥・発酵させた郷土の独特な食べ物「くろこ」の製造が、地域の住民団体により行われている。

「くろこ」は伝統知と歴史的なストーリーを有し、食品ロスを減らす食べ物として地域の催し物などで活用を進めている。

また、拠点施設の利用機会を増やすため、カフェスタンドを設置、ナチュラルガーデンを造園してアメニティ機能を強化した。これにより物販機会が増え、ガーデンフェスタや星空風景写真展など、交流と話題が創出されている。

E.1.5 情報・教育・研究

情報

- エリア内の拠点施設、ビジターセンターでの情報提供（7 か所）
- ウェブサイト、フェイスブック（フォロワー 1690 人）、X（フォロワー 35 人）を月 2 ～ 3 回更新
- 総合パンフレット
- エリアマップ（英語）
- かんばら散策村めぐりマップ（日本語・英語）（2023 年）（写真 E.1-5）
- 広報誌「あさまびと」（年 4 回発行、バックナンバーをウェブサイトで公開）
- 冊子「火山防災はじめての一步」（2021 年）
- 冊子「草軽電鉄跡をドライブで探訪しませんか」（2022 年）
- リーフレット「星空案内」をホテルに配布（2023 年）
- コミュニケーションの場として「ジオカフェ」を年 4 回開催
- 風景・植物・星空などをテーマに写真展（地域交流センター）
- 普及イベントを観光施設（鬼押し出し園）や宿泊施設（ホテル軽井沢 1130）で実施
- 佐久環境フェア、イオンモール太田店へのブース出展



写真 E.1-3



写真 E.1-4

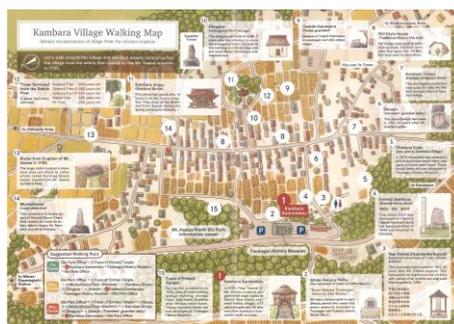


写真 E.1-5 かんばら散策村めぐりマップ（英語版）

- 新聞広告（年1回）

教育

プログラムと教材

| | | |
|-------|------------|---|
| 小学生 | フィールドプログラム | 町村めぐり 親子自然観察 ほか |
| | 教材 | 読本「鎌原村のふくちゃん家族」（2021年増刷） 読本「埋もれた村からあなたにメッセージ」（2023年） |
| 中学生 | フィールドプログラム | スカイロックトレイル学習（写真 E.1-6） 浅間園自然遊歩道学習 砂防施設見学による防災学習 ほか |
| | 教材 | 解説書「浅間火山ハンドブック」 解説書「烏帽子火山群ハンドブック」（2021年） |
| 高校生 | 連携プログラム | 探求学習・ESDの支援 理科・社会科連携プログラム |
| | インターンシップ | 高山蝶保護パトロール 地域の魅力発信 |
| 教育関係者 | 研修コース | 鎌原観音堂、浅間園自然遊歩道、鹿沢園地 |
| 大学生 | 協力・支援 | 夏季ゼミ支援、巡検案内、卒論相談 |
| 幼児向け | 教材 | あさまんぬりえ 正二十面体立体模型ペーパークラフト 「あいうえおシート じおぱーくのなかまたち」（2021年） |
| 一般向け | 講座 | 「1783年天明浅間山噴火で起きた3つの流れ」 「火山がつくる地形」 「火山の噴火と植生の一次遷移」 「火山と水の循環・森林の多面的機能」 など |
| | 実験・観察・体験 | 噴火実験、鉱物観察、石積み・石あてゲーム（写真 E.1-7）、クラフト、草木染め |
| 教育旅行 | モデルコース | (1) 災害からの復興と災害伝承（3時間） コース：鬼押出し園または浅間園→六里ヶ原（車窓から）→鎌原観音堂→孺恋郷土資料館 浅間山天明噴火と災害からの復興に焦点を当てたベーシックプログラム（写真 E.1-8）。 (2) 火山の恵みと災害（5時間） コース：鬼押出し園または浅間園→浅間火山観測所→浅間牧場→やんば天明泥流ミュージアム |

| | | |
|-------|-------|---|
| | | <p>火山高原の雄大な景色を楽しみながら、火山がもたらす恵みと災害について考えるプログラム。</p> <p>(3) 火山地形と土地利用 (3 時間) コース：キャベツ畑と別荘地→浅間山溶岩樹型→風穴→鹿沢インフォメーションセンター 火山活動の影響を受けた地形・土壌を観察し、災害の緩和と環境適応を考えるジオプログラム。</p> <p>(4) 火山地帯の環境と生態系 (3 時間) コース：鹿沢インフォメーションセンター→鹿沢園地または湯の丸高原 火山が持つ環境機能と気候変動が災害に及ぼす影響を考え、環境保全への意識と理解を高めるエコプログラム。</p> |
| 企業・団体 | 研修コース | 火山防災、水資源の保全、生物多様性、森林の多面的機能 など |



写真 E.1-6



写真 E.1-7



写真 E.1-8

学び支援ツール

ボールペン、クリアファイル、フィールドノート（2021 年）、SDGs トレーディングカード（2022 年）、星座早見盤（2023 年）

研究

大学との連携協力

筑波大学（土壌・植生）、駒沢大学（地域資源）、東海大学（人間環境）

現在進められている研究

- 次世代火山研究・人材育成総合プロジェクト（プロジェクト・リーダー：藤井 敏嗣）
 - 「降下火砕堆積物層序に基づく浅間前掛火山の大規模噴火の高分解能履歴復元」（日本大学）
- 文化財保全活用調査（孺恋郷土資料館）
- 北白川宮吾妻牧場の研究（やんば天明泥流ミュージアム）

研究発表

- 「『浅間山夜分大焼之図』は史実を誇張したものか」（群馬県立自然史博物館 ポスター発表 2021年）
- 「考古学からみた、天明3（1783）年の浅間山噴火における鎌原村と吾妻川流域の被害について」（日本ジオパーク全国大会（白山手取川） ポスター発表 2022年）
- 「浅間山北麓ジオパークで行われた子供向け科学探求プログラム」（日本地球惑星連合大会 口頭発表 2023年）
- 「火山と高原リゾート」（北軽井沢大学村 研究講演 2023年）
- 「居家以岩陰遺跡から見た縄文時代における人の生活と流れについて」（群馬県立自然史博物館 ポスター発表 2023年）
- 「その時、地域の持続可能性はどのように支えられたか？天明噴火と熊本地震」（群馬県立自然史博物館 ポスター発表 2024年）
- 「地域の資源を『まもり』ながら『いかす』—ジオパーク保全活用プログラムの実践から見えてきたこと」（群馬県立自然史博物館 口頭発表 2024年）

E.2 その他の遺産

エリアには、文化財として指定・登録された自然遺産が13点、文化遺産が26点存在する（自己評価表資料-ii）。

これらの遺産から、火山がつくり出した地形と環境は、この地域の自然と文化に、適応（レンゲツツジ、高山蝶）、利用（避暑地、高原野菜、湯治場）、交通（難所の往来）、人々の暮らし（民俗・伝承・風土）など様々な面に影響を及ぼしていることを知ることができる。

E.2.1 （地形・地質以外の）自然遺産

ミヤマシロチョウ

環境省レッドデータブック（2020年）絶滅危惧IB類（EN）

群馬県指定天然記念物

ミヤマシロチョウは標高1400～2000mの亜高山帯に生息し、国内で絶滅のおそれが高まっている蝶である。かつては本州中部の山岳域に生息していたが、各地で減少し、現在では湯の丸高原や南アルプスなど限られた地域でしか見ることができない。生息域が狭く・個体数も極端に減少していることから、保護の取り組みが急務となっている。「嬭恋村高山蝶を守る会」が、蝶の食樹となるメギ等の保護、生息地の下刈り、越冬巣のモニタリングと繁殖地のパトロールを継続的に実施している。毎年、群馬県立自然史博物館で、活動についてのポスター発表が行われている。



写真 E.2-1

当ジオパークでは、2021年に高校生のジュニアインターンシッププログラムとして、同会の協力を得てミヤマシロチョウの保全活動を体験するフィールドワークを実施、高校生のインタビューが公共放送の番組で取り上げられた（写真 E.2-1）。

湯の丸レンゲツツジ群落

国指定天然記念物

湯の丸高原には約 60 万株を数えるレンゲツツジ群落がある。開花期には高原一帯を赤く染め上げて壮観を呈し、観光資源として地域に大きな役割を果たしている。レンゲツツジは酸性の火山灰土壌を好み、火山地帯に適応した植物であることに加え、群落地一帯ではかつて牧場が営まれ、家畜の忌避植物であるレンゲツツジが選択的に残されたことが群落成立の要因となっている。畜産業の衰退に伴い放牧数が減少した現在、

群落地の森林化が進んでおり、その生育環境が脅かされつつある。このため、「湯の丸レンゲツツジ保存会」や地元の高中生らが中心となり、群落地の下刈りや雑木撤去などの保全活動が継続的に行われている。

湯の丸レンゲツツジ群落は、ジオ（火山）・エコ（レンゲツツジ）・人（牧場）の相互作用を示す分かりやすい例として、ガイド養成講座やエコプログラム、ESD などで取り上げている（図 E.2-1）。



図 E.2-1 スライドプログラムの一部

E.2.2 文化遺産

旧草軽電鉄北軽井沢駅舎

文化庁登録有形文化財（建造物）

草軽電気鉄道（草軽電鉄）は 1926（大正 15）年に軽井沢～草津間が全線開通し、総延長 55.5km を約 3 時間半かけて結んだ軽便鉄道である。突出したパンタグラフを持つ機関車は「カブトムシ」の愛称で親しまれた。群馬県と長野県の県境を成す峠の交通に利便をもたらした。北軽井沢の観光産業と別荘文化の発展に大きく貢献したが、その後のモータリゼーションの進展と相次ぐ台風災害により、1962（昭和 37）年に全線廃止となった。

北軽井沢駅舎は路線中現存する唯一の駅舎である（写真 E.2-2）。三原に橋脚の一部、電車道、スイッチバック跡が残る。北軽井沢観光協会が遺品の収集・展示をしている。

当ジオパークでは、「美しい景観・温泉・爽やかな気候によって育まれる避暑地・リゾート文化」を重要な地域資源と位置づけてその保全活用を進めており、路線跡の案内冊子「草軽電鉄跡をドライブで探訪しませんか」の作成（2022 年）や路線跡を巡るツアーを企画（2023 年）している。ツアーでは、元駅員の家族からの話を聞く機会を設けて、証言や情報の収集にも努めている。また、駅舎を寄贈した法政大学と関係の深い北軽井沢大学村からサマーセミナーの依頼を受け、「火山と高原リゾート文化」をテーマに研究講演を行なっている（2023 年）。



写真 E.2-2

E.2.3 無形遺産

くろこ

100年フード（文化庁）

くろこは、天保の大飢饉（1832～1839年）の時代、凶作が続き食料が底をついたとき、先人達が、屋外に放置してあるでんぷんを採った後に出たじゃがいもの残りかすに、ネギと味噌を加え焼いて食べた事が発祥とされる。特別な温度管理を必要とせず、屋外で生産可能なくろこは、伝統知と歴史的なストーリーを有し、食品ロスを減らす価値ある食品として、2022年に文化庁の「100年フード」に認定された。

当ジオパークは、2023年に拠点施設に共同加工場を整備して、「孀恋村くろこ保存会」によるくろこの製造を支援、「鎌原観音堂周遊マルシェ」などのイベントや物販コーナーなどでの利用を促進している（写真E.2-3、E.2-4）。



写真 E.2-3



写真 E.2-4

天明噴火の語り継ぎ

防災資産 優良事例（国土交通省、内閣府）

天明噴火で大きな被害を受けた鎌原地区では、「鎌原観音堂奉仕会」「鎌原和讃会」などが中心となり、被災と復興の歴史を今日まで語り継いでいる。

噴火の時、助かった村人の多くが観音堂に逃れた人々だった。住民には、避難場所となり、心の拠り所ともなった観音堂への深い敬意があり、それが今日まで続く語り継ぎの原動力となっている。活動は災害の伝承のみならず、この地域の風土とアイデンティティ、住民の土地に対する深い愛着を描き出している。

当ジオパークでは、天明噴火から240周年にあたる2022年に、日本ジオパーク全国大会（白山手取川大会）自然災害伝承碑分科会でこのことを取り上げ、災害の発生から現在に至るまで240年続いている語り継ぎを支える力として、「祈りと伝承の一体性」があることを指摘した。資料配布コーナーに設置した天明噴火240周年記念誌「天明3年浅間山噴火災害復興における熊本藩の貢献」（写真E.2-5）は完配となる反響があった。

2023年には関連する研究ポスター「その時、地域の持続可能性はどのように支えられたか？天明噴火と熊本地震」を、群馬県立自然史博物館で発表している。

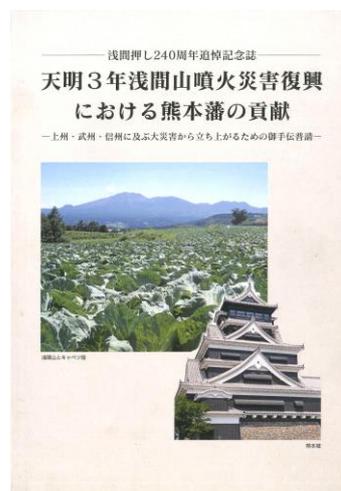


写真 E.2-5

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

再エネ推進と環境保全のための行動ポリシーの必要性を指摘

再生可能エネルギー（再エネ）の推進に伴いソーラーパネルの設置が進む一方で、別荘地近傍で景観への影響が懸念されている状況がある。景観形成重点地区のゾーニングはなされているが、視視性に乏しく広く認知されていないこと、再エネ推進と環境保全のための行動

ポリシーが明確になっていないことを課題として認識しており、改善策を模索している。これについては、JGN 気候変動ワーキンググループでの議論を提案しているところである。

プラスチック製使い捨て食品容器の使用量を削減

2023 年に拠点施設に設置したカフェスタンドでは、提供するマドラーを木製に、カップ容器を紙製にした。また、地元の飲食店「まめや」の協力を得て、イベントなどで提供する弁当の容器は紙製の割合を増やし（写真 E.2-6）、プラスチック製使い捨て食品容器の使用量の削減を進めている。



写真 E.2-6

バイオマスエネルギーの利用普及

交流イベントで薪を燃料とするピザ窯の使用や燻製サーモンづくりなどを行い、バイオマスエネルギーの普及機会としている。

食品ロスを減らす郷土の食べ物「くろこ」の活用

じゃがいもからデンプンを使った残りかすを凍結乾燥・発酵させた郷土の独特な食べ物「くろこ」を、製造に特別な温度管理を必要とせず、食品ロスを減らす環境機能を持つ食品として宣伝、地域の催し物などで活用を進めている。

火山防災・土砂災害防止の普及活動

2021 年に火山防災の普及冊子「火山防災ははじめの一步」を作成、絵を多く用いて親しみやすいものとなるよう工夫した。

同年にホスト開催した火山砂防フォーラムでは、ジオパークガイド、消防士、農家、砂防の専門家が地域防災について話し合い、災害伝承が根付いている地域の声を発信した。また、国土交通省利根川水系砂防事務所と連携して、地域の中学生にフィールドでの火山学習と砂防施設見学を組み合わせさせた火山防災学習を実施した（写真 E.2-7, E.2-8）。



写真 E.2-7

2023 年には群馬県地すべり防止工事士会から依頼を受け、火山地帯の土砂移動とその影響について講演した。講演では、天明浅間山噴火の際に発生した鎌原土石なだれの発生機構について、「発生地点にあった柳井沼は地すべり地形にできた沼」だったとする井上公夫氏の説や、単一の土砂災害としては県内最大規模の被害となる、昭和 12 年小串硫黄鉱山山津波は、火山地帯の熱性変質作用が災害に関与した可能性があることなどを取り上げた。続いて「生命・財産を守りながら、自然を賢く生かし、持続可能な社会をつくろう」と提起、(1) 土砂災害は重力的な安定に向かう自然現象であるから、前に戻すよりも後にできた地形を生かすこと；(2) 土砂災害を物理科学面から評価するとともに環境倫理面からも評価すること；を提言、実例として八ッ場ダムの堤体を当初計画よりも 600m 上流に移したことで、国指定名勝の吾妻峡が水没から免れたことを取り上げた。



写真 E.2-8

「火山防災の日」制定を受けて

2023 年、活火山法が改正され、浅間山に国内初となる火山観測所が設置された日にちなみ 8 月 26 日が「火山防災の日」に制定された。

これを受けて同日に火山防災ワークショップを実施、2004 年の浅間山噴火を振り返った。会場にはその時の噴火で出てきた火山噴出物の実物を展示、火口からの距離に応じて噴出物の大きさがどのように変化するのを見てもらった。参加者からは、「雨どいに溜まった火山灰を掃除せずにいたら腐食して穴が開いた」「別荘地に住んでいるが防災無線が聞こえなかった」など当時の経験が語られた。



写真 E.2-9

12 月に開催したジオパークフォーラムでは、山梨県富士山科学研究所からコーディネーターを、気象庁浅間山火山防災連絡事務所から講師をそれぞれ招き、ワークショップの内容をさらに掘り下げた。会場は災害時の避難所にもなっており、備蓄物資の展示や避難所機能を生かした炊き出しの演習を行なった（写真 E.2-9）。フォーラムでは、今後の活動の方向性が 3 つの提言にまとめられた（D. 前回の指摘事項に関する取組・改善点 III-7 を参照）。

E.3 管理運営

運営体制

浅間山ジオパーク推進協議会（34 名）の下部組織である、調査・保全、教育・防災、広報・観光の各専門委員会から成る運営委員会（62 名）と事務局（6 名）が、実質的なジオパーク活動を担っている。2024 年よりエリア内にある博物展示施設「孀恋郷土資料館」の館長が新たに学識委員に加わり、学術的品質の確保が図られた。

財務状況と予算

過去 4 年間の予算規模は 1 千 8 百万円前後で推移している。主な収入源は構成町村の負担金、ガイド・物販収入である。

ガイド事業は、2022 年に受け入れ人数 1 万人を突破し、単体事業として黒字化を達成している。

カフェスタンドの整備、商品開発により、物販収入の拡大を図っている。

人員・女性

事務局員は 6 名、うち女性は 2 名である。常勤の地球科学者は不在である。

事務局長と次長は構成町村の自治体職員が務め、ともにジオパーク専任として業務にあたっている。

事務局員のうち男女 1 名ずつが、運営組織「浅間山ジオパーク推進協議会」から直接雇用される職員である。このうち女性は事務局の中で最も長いキャリアを有している。当ジオパークを特徴づける活発なガイド活動は彼女の働きによって支えられているところが大きい。男性は環境系専門員である。

ジオパークスタッフ表

| No. | 名前 | 任用 | 任務 | 専門・技術 | % 時間 | 性別 |
|-----|--------|-----------------|-------------------------------|-------|------|----|
| 1 | 宮崎 貴 | 正職員 (孺恋村) | 事務局長 | | 100% | 男 |
| 2 | 塩野 耕治 | 正職員 (長野原町) | 事務局次長 教育・防災 | | 100% | 男 |
| 3 | 土屋 智美 | 正職員 | ガイド事務 | | 100% | 女 |
| 4 | 古川 広樹 | 正職員 | 専門員 | 環境 | 100% | 男 |
| 5 | 本多 力斗 | 正職員 (孺恋村) | 広報・観光 | 考古学 | 100% | 男 |
| 6 | 出口 亜沙美 | 会計年度任用 (孺恋村) | 調査・保全 | | 100% | 女 |
| 7 | 土屋 茂次 | 運営委員 ガイドの会 | ガイド運営 保全活動 | | 50% | 男 |
| 8 | 古屋 祐之 | ガイドの会 | ガイド安全管理 | 登山技術 | 50% | 男 |
| 9 | 宮崎 光男 | 運営委員 | 運営委員長/広報・ 観光/教育支援/保全 活動 | 教育 | 50% | 男 |
| 10 | 黒岩 俊明 | 運営委員 | 調査・保全/火山地 質アドバイザー | 地質 | 50% | 男 |
| 11 | 嶋村 明 | 運営委員 | 調査・保全 植物モニタリング | 植物 | 50% | 男 |
| 12 | 湯本 善太郎 | 運営委員 | 教育・防災 | 教育 | 50% | 男 |
| 13 | 石渡 江里子 | 地域団体職員 | 広報・観光 地域協働 | | 50% | 女 |
| 14 | 土屋 志歩 | 運営委員 ガイドの会 | 広報・観光 | | 50% | 女 |
| 15 | 下谷 通 | 運営委員 | 広報・観光 教育支援 | 郷土史 | 25% | 男 |
| 16 | 中山 邦男 | 運営委員 | 教育・防災 | 教育 | 25% | 男 |
| 17 | 下谷 博 | 運営委員 | 教育・防災 保全活動 | | 25% | 男 |
| 18 | 松本 初恵 | 運営委員 | 広報・観光 | 植物 | 25% | 女 |
| 18 | 山本 后世 | ガイドの会 | 救急アドバイザー | 救護 | 25% | 女 |
| 19 | 関 俊明 | 博物施設職員 | 施設館長 | 考古学 | 25% | 男 |
| 20 | 藤野 麻子 | 博物施設職員 | 学芸員 | 考古学 | 25% | 女 |
| 21 | 堀 保昭 | ガイドの会 | 国際交流 | 英語 | 25% | 男 |

E.4 重複（オーバーラッピング）

当ジオパークのエリアは、面積の 38%が上信越高原国立公園と、32%が浅間鳥獣保護区と重複する。国立公園内にあるサイトは 20 か所で、サイト全体の 51%を占める。

国立公園内にあるサイト

| | |
|---------------|--|
| 特別保護地区 (3) | A1 千トン岩、A2 トーミの頭、A3 シラハゲ |
| 第 1 種特別地域 (6) | B1 鬼押し出し溶岩、B2 吾妻火砕流、B4 蜀山人の碑、B5 上の舞台溶岩、B6 下の舞台溶岩・黒豆河原溶岩、B7 六里ヶ原の火山荒原 |
| 第 2 種特別地域 (4) | B3 浅間山溶岩樹型、C4 浅間牧場、D2 鹿沢温泉・新鹿沢温泉、D3 鹿沢園地 |
| 第 3 種特別地域 (2) | B8 浅間高原しゃくなげ園、D4 たまだれの滝 |
| 普通地域 (5) | A4 トーミ断層、D1 湯の丸レンゲツツジ群落、D5 百体観音、D6 烏帽子・浅間火山群、D7 孺恋農場 |

当ジオパークのエリアは、浅間山の火口から吾妻川にかけて分布する火山性堆積物の一体性を示すもので、天明噴火により埋没した鎌原地区や天明泥流が流下した吾妻川流域が含まれるところに、国立公園や鳥獣保護区にはない独自性がある（図 E.4-1）。

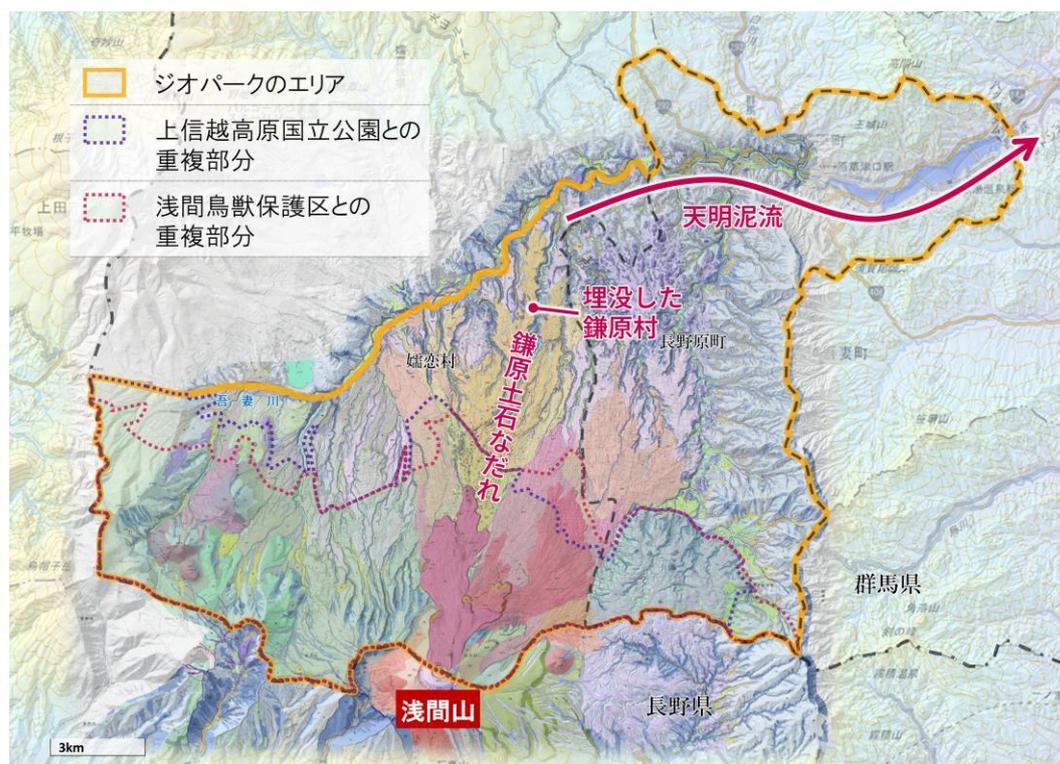


写真 E.4-1

国立公園内のサブエリア案内板・サイト解説板については、盤面内容と設置場所について調整を行なっている。サブエリア案内板は景観に配慮した配色を施し利用マナーを記載するなど国立公園との協調を図っている。

また、環境省の国立公園事業「こどもパークレンジャー」に協力し、国指定特別天然記念物である浅間山溶岩樹型の保全体験（2022年）やスノーシューを使った雪上ハイキング（2021、2023年）などを行なっている。

このほか、2021年には国立公園とジオパークの連携事業として、解説書「烏帽子火山群ハンドブック」を作成した。ハンドブックは、国立公園の自然・景観とともに火山と地質への理解を深めてもらうため、地質図、用語集、地質観察のポイントがわかるコラムを収録した。また、フィールドに持ち出して活用してもらうことを想定し、コースガイドマップや国立公園の利用ルールとマナーも収録した。このハンドブックは毎年中学生に配布している。

当協議会は浅間山の北面に登山道を整備する計画を推進しており、利用者の安全確保、開通後のガイドツアーでの利用について環境省と調整している。

E.5 教育活動

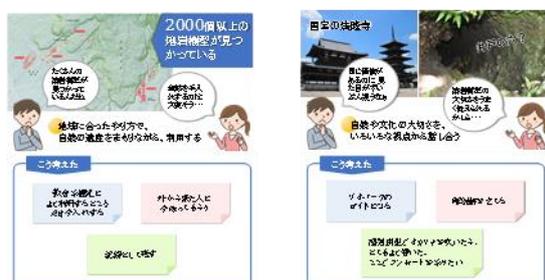
2023年までに、エリア内にある小中学校と高校合わせて8校中7校にジオパーク学習を実施している。小学生が学習したことを紙にまとめたものは拠点施設に掲示して一般への公開を行なっているほか、環境省国立公園事業を活用して作成した解説書「浅間火山ハンドブック」「烏帽子火山群ハンドブック」を毎年エリア内の中学校に配布している。また、学校職員、教育委員会関係者とジオパークの連携を深めるための手立てとして教育懇談会を実施している。この中で「ジオパークについて学べる機会を作ってほしい」との要望が出されたことから、2023年より教育関係者向けの研修コースを設けている（資料E.5-1）。



写真 E.5-1

2022年にホスト開催した「地震火山地質子どもサマースクール」では、全国から集まった子どもたちが浅間山の火山性堆積物の流れを科学的に探究した（写真E.5-1及び資料E.5-2）。開催経験から得られた火山研究の最新の知見や噴火実験の手法は地域にフィードバックしており、4つのテーマから成る探求型プログラムを開発（図E.5-1）、2023年の日本地球惑星科学連合大会で発表した（資料E.5-3）。

浅間山北麓ジオパークの探求型プログラム《地質・文化》



浅間山北麓ジオパークの探求型プログラム《生物・環境》



図 E.5-1

2023年の日本ジオパーク全国大会では、地域の高校生が初めて現地会場でポスター発表を行なった（資料D.1-4）。この発表がきっかけとなり、高校教員が認定ガイドと運営委員になった。2024年度からジオパークと高校理科・社会科連携プログラムがスタートすることとなり、高校との連携が大きく前進している。

このほか小学校5年社会科の単元「高い土地の暮らし」では当ジオパーク地域が扱われており、学習指導要領の改訂に伴い教科書と参考書への写真提供、編集協力を行なっている。

E.6 ジオツーリズム

ガイドツアーの年間受け入れ人数は、2020年から21年にかけてコロナパンデミックによる落ち込みがあったものの、2022年に回復して1万人を突破（図E.6-1）、単体事業として黒字化を達成した。

ツアーの種類は、(1) 一般型：浅間園、鬼押し出し園、鎌原観音堂、八ッ場ダム、吾妻渓谷などを巡る常設ツアー及び登山、草軽電鉄廃線跡巡りなどの企画募集ツアー；(2) 特別型：立入りには認定ガイドの同行が必要なスカイロックトレイルや浅間牧場で行われるツアー；(3) 宿泊連携型：朝散歩、星空観察など、宿泊施設が発着地となるツアー；に大別される。

このうち宿泊連携型ツアーは、宿泊事業者の宿泊プランに組み込まれ、催行期間が長く、利用者は予約不要で、無料もしくは低額でツアーに参加できることから、利用が最多となっている。

認定ガイドは2023年時点で107名が登録されている。移住者が半数近くを占め（図E.6-2）、ガイドの担い手として定着してきている。

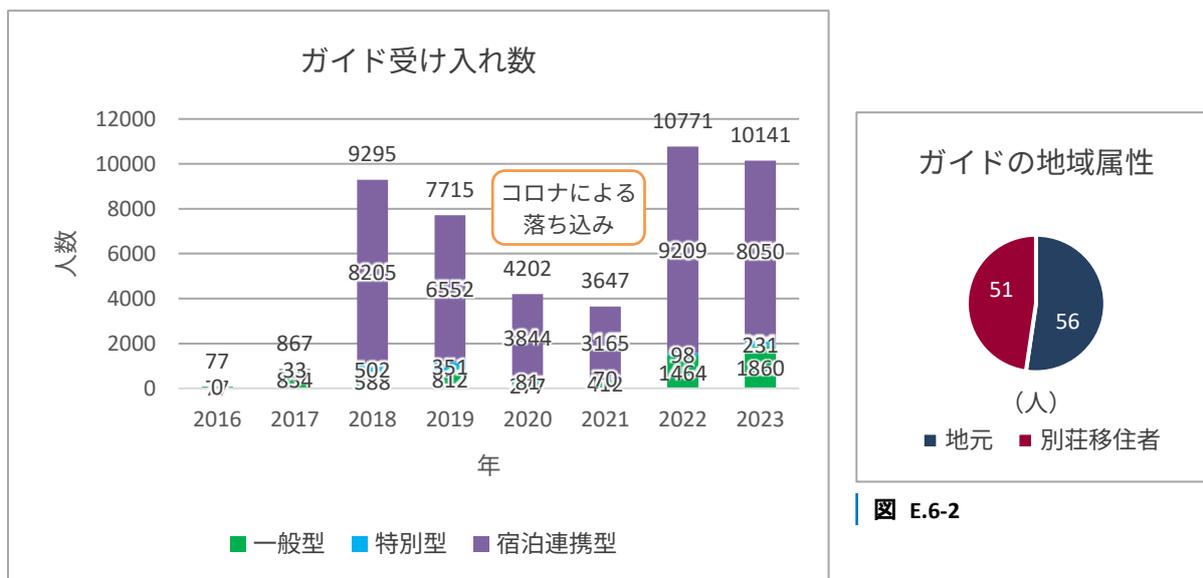


図 E.6-1

図 E.6-2

認定ガイドの組織「浅間山北麓ジオパークガイドの会」では、研修会の実施や雨天時のプログラムとして、解説スライドやクラフトプログラムの開発を自主的に行なっている。

エリアに研修所を有する学校などから、ESDプログラムとしてのガイド依頼が増加傾向にあることから、「浅間山北麓でのエコプログラムの手引き」（資料E.6-1）を作成、ガイドに提供している。

ネットワークに関連する活動としては、他地域のジオパークガイドとの交流や、日本ジオツーリズム協会へのツアー提供を進めている。

ガイド制度の管理については、認定資格を更新制とした。山岳域にあるスカイロックトレイルのガイドについては、安全管理講習の受講を条件とする免許制を導入した。

また、長野原町の地域づくり団体「つなぐカンパニーながのはら」と協働ツアーを企画（2024年に実施）、弁当の企画など、アイデアを出し合いながら協働を進めている。

E.7 持続可能な開発とパートナーシップ

E.7.1 持続可能な開発ポリシー

国連海洋科学 10 年の取り組み

2021 年に清流を好み国内で希少なクロカワゴケが自生している沢で、溪流クリーンアップ作戦を実施、長年放置されていた河川ゴミを撤去した（写真 E.7-1）。

沢にはタイヤや自転車、農業用マルチ、刈払機、布団などが投棄されていた。中には使いかけの農薬や肥料など、生態系に直接的な影響が懸念されるものもみられた。

活動を通して、(1) 川のクリーンアップは、郷土美化のみならず海の豊かさを守ることもつながっている；(2) 海のないジオパークでも、海の豊かさを守るためにできることがある；(3) 時として地域や国境をまたぎ世界の環境に影響を及ぼしている私たちの意識と行動を変えていく必要がある；ことを参加者の間で共有した。



写真 E.7-1

浅間石の持続可能な利用のための啓発を開始

2023 年に浅間石の保全方針を策定、啓発資料「大地の記憶を物語り 独特の景観をつくり出している浅間岩」を作成し（資料 D.3-2）、地権者への説明と外部に向けた持続可能な利用のための啓発に着手した。

水資源の保全事業に協力

天然水の販売を行なっている孺恋銘水株式会社及びグループ会社であるアスクル株式会社が、孺恋村と協働して取り組んでる水資源の保全事業「孺恋グリーンプロジェクト」に協力している。

社員に向けて実施した森林の多面的機能を考えるエコプログラム（写真 E.7.1-2）では、森林の水源涵養機能について考えた。水源の山となっている小棧敷山に残る天然のカラマツ林を社員の方々に見てもらい、「天然カラマツは木材市場で高値がつく。伐採して売れば儲かるのになぜ残されているのか？」と問いかけた。

同社には水資源保全のための連携協定を提案中である。



写真 E.7-2

エリア拡大構想の状況

浅間山南麓地域のジオパーク認定を目指す市民の動きが活発化している。

2023 年 10 月に「浅間山南麓ジオパーク構想市民の会」が発足、毎月ミーティングを行っており（資料 E.7-1）、活動が地方紙で報道されている（資料 E.7-2）。

ミーティングには当ジオパークも参加、協力しており、浅間山を抱える地域の地球科学的価値や当ジオパークの認定までの経緯、運営体制、構想実現のためには予算と人員の裏付けがある保全管理計画が不可欠であることなどを説明した。市民との対話の中では行政の巻き込みが課題となっていることが確認できた。

当ジオパークは浅間山全体の持続可能な利用を目指すことをビジョンに掲げており、人口の減少・流出に悩む地域とオーバーツーリズムが起きている地域が隣り合っている社会状況を変える枠組みとして、北麓と南麓を統合するエリアを持つ「浅間山ジオパーク」を目指す方針である。これに向けて 2024 年度から 3 か年かけて南麓地域の資源とサイトの調査、ストーリー化、住民ワークショップと地元自治体への説明を柱とする「浅間山南麓ジオパーク推進事業」を実施する計画である。

E.7.2 パートナースhip

ジオパークの理念に賛同する企業・団体が相互に協力し、浅間山北麓ジオパークの魅力を外に発信し、利用者の拡大を図ることで、人々の自然環境の保全への理解を深めるとともに、持続可能な地域社会の発展に寄与することを目的に、10 の企業・団体と相互応援協定を結んでいる。協定を結んでいる企業・団体はウェブサイト公開している。

相互応援協定を締結している企業・団体

- 浅間酒造株式会社（食事と休憩所の利用）
- 妻の手しごと（活動紹介、物販利用）
- つつじの湯（利用案内）
- 鬼押し出し園（プロモーション協力）
- お食事処 水車（食事利用）
- 牛乳屋 松本（物販利用）
- 有限会社卸売センターサンエイ（物販利用）
- 蕎麦茶屋 nanakusa（食事利用）
- ゲストハウス UBUKATA（食事とコミュニケーションスペースの利用）
- 孀恋村くろこ保存会（郷土の独特な食べ物の利用）

パートナーシップの基準と内容を明確にするため、新たに「パートナーシップガイドライン」（資料 E.7.2-1）を策定した。ガイドラインでは、地質物品の販売に関わっていないことなどの確認をパートナーに求めている。パートナーシップの内容・分野については、(1) 地質保全；(2) ジオパークの魅力発信；(3) ツーリズム；(4) 防災；(5) 地域資源の持続可能な開発；(6) その他ジオパークの理念に合致すると認められるもの；と定めた。

このガイドラインは順次相互応援協定に適用していく。

地域づくり団体との連携

長野原町の地域づくり団体「つなぐカンパニーながのはら」と協働するツアーを企画、2024 年に実施した（写真 E.7-3）。

企業との連携活動

鬼押し出し園で、毎年 5 月の大型連休に毎年鉱物観察や噴火実験などのイベントを実施している（写真 E.7-4）。

ホテル軽井沢 1130 のラウンジで開催された浅間山の写真展に合わせてジオパークアカデミー（2022 年）を実施（写真 E.7-5）、3 人の話者が日替わりで話題提供した。

株式会社モンベルと 2022 年より「モンベルフレンドジオパーク」として関係を結んだ。ジオパークオリジナルジャケットは同社で製作している（写真 E.7-6）。



写真 E.7-3



写真 E.7-4



写真 E.7-5



写真 E.7-6

環浅間連携の活動

南麓地域で毎年開催される環境について学び、体験できる催し「佐久環境フェア」にブース出展をしている。

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

2021年に地域住民から成る「鎌原を語り継ぐ会」によって、地域に伝わる独自の文化や物事の由来、逸話などが「天明いらいの鎌原を語る」という冊子にまとめられた。ジオパークは、このような地質風土の多様性がもたらす世界観や物語を、地域住民が主役となって表現していくプログラムでもありとされており、この冊子を子どもへの読み聞かせなどに活用していくことを考えている。

2023年に拠点施設に整備された共同加工場で、地域の住民で組織される団体「孀恋村くろこの会」が、郷土の独特な食べ物「くろこ」を製造した。当ジオパークは「鎌原観音堂周遊マルシェ」（写真 E.7-7）を企画し、会に対してくろこの販売ブース出店を依頼した。マルシェは地域住民が企画段階から関わり、鎌原地区の様々な場所にブースを配置、利用者が徒歩で周遊してサービスを利用できる商店街を1日限りではあるが復元した。



写真 E.7-7

このほか拠点施設では、地域住民、文化協会、社会福祉協議会などと協働して、ジオサイト絵画展、社会福祉グループの作品展などが行われており、地域資源の持続可能な利用に資する山野草や手工芸品などの展示・販売の機会を提供している。

また、ジュニアインターンシップ、夏休み期間中の学童保育の受け入れを実施しており、若い世代が地域の中での遊び・学び・働き・交流を通して成長し、地域の自然と文化を継承し、未来を創造していく姿を見届けたいと願っている。

E.8 ネットワーク活動

当ジオパークはこの4年間、国内ネットワークでの存在感向上を重点目標に位置づけて以下の活動に取り組んできた。

ワーキンググループへの参加

JGN 自然災害伝承碑登録推進ワーキンググループに参加し、2022 年全国大会（白山手取川大会）分科会で、浅間山天明噴火を伝える自然災害伝承碑の登録状況を報告した。天明噴火発生から現在まで 240 年に渡って続けている災害伝承を支えている力について分析し、語り継ぎを支える力として「祈りと伝承の一体性」があることを指摘した（資料 D.1.1-3）。資料配布コーナーに設置した天明噴火 240 周年記念誌「天明 3 年浅間山噴火災害復興における熊本藩の貢献」は完配となる反響を得た。

ブロック大会の開催

2022 年に関東ブロック大会「伝えよう 人と大地のものがたり」を開催した（資料 D.1.1-1）。大会では、当ジオパークで定着、進展しているガイドツーリズムを発信、2015 年全国大会（霧島）で発表された「私たちが目指すガイド像 2015 in 霧島」を踏まえ、「自分の地域だけではなく地球全体を伝えるには？」など、目指すガイド像の地域適用を議論した。また、参加者へのメッセージとして、大会テーマをチャートモデルにまとめた『ジオパークの「宝」と持続可能な社会のための「行動」をつなぐ「伝える力」』を発表した（資料 D.1.1-2）。

2023 年全国大会（銚子・秩父大会）の共同開催

2023 年全国大会 in 関東を共同開催し（資料 D.1.1-4）、当ジオパークはフェノロジー（生物季節）をテーマとする分科会の企画運営を担当した。また、教育をテーマとする分科会では運営委員が事例発表を行なった。

同大会では、当ジオパーク地域から初めて高校生が会場でポスター発表をした。ポスターは火山の影響を受けた土壌と水の特性を考察、噴火を繰り返す火山はそこに住む人々の暮らしを豊かにしたか、貧しくしたかという評価を試みるもので、高校生と大人たちの間で活発な議論がなされた（写真 E.8-1）。

大会報告書の作成では大会宣言の起草を務めた。



写真 E.8-1

全国大会での発表

2021 年全国大会（島根半島・宍道湖中海大会）では、天明噴火で流出した「鬼押し溶岩」や噴火の様子が描かれた絵図について考察したポスター「『浅間山夜分大焼之図』は史実を誇張したものか？」を発表した。神話・伝説のなかには、古代からの人々の自然観や災害の歴史が語られている。それを科学的にとらえ直すことで、新たな地域の自然理解や魅力発見につながる可能性を検討した。

また、2023 年全国大会（白山手取川）では、「考古学からみた、天明 3（1783）年の浅間山噴火における鎌原村と吾妻川流域の被害について」と題するポスター発表を行なった（資料 D.1.1-3）。

全国研修会への参加

2020 年、防災減災啓発をテーマにオンラインで開催された全国研修会（四国西予）でグループリーダーを務め、意見の集約と共有をした。

その他のパートナーネットワーク

- 火山砂防フォーラム（2021年）
- 地震火山地質子どもサマースクール（2022年）
- 全国火山博ネットに参加、巡検案内（2023年）
- 浅間山南麓市民の会との連携活動（2023年）

E.9 地質鉱物資源の販売

当ジオパーク協議会を構成する団体・事業者はいずれも地質鉱物資源の取引に関与していないことを確認している。

指摘のあった浅間石については、(1) 独特の景観を形作っているもの；(2) 珍しい現象が起きたことを示す証拠となるもの；(3) 地域から大切にされているもの；(4) 教育やツーリズムに活用が期待できるもの；を大地の遺産として保全していく方針である。

2021年から保全のための基礎資料を得ることを目的として浅間石の分布調査を開始（写真 E.9-1）、これまでに 276 地点の岩塊の大きさ、形質、外観写真、位置情報を記録している。

上記の方針に沿って、調査・保全委員会で保全の必要性を啓発するための資料「大地の記憶を語り 独特の景観をつくり出している浅間岩」（資料 D.3.8-1）を作成しており、地権者への説明や外部に向けた発信を進めている。



写真 E.9-1

F. まとめ

当ジオパークでは、宿泊施設と連携しながら有償のガイド活動が活発に行われており、特色のひとつとなっている。

ガイド受入れ人数は、2020年から21年までコロナパンデミックの影響を受けて落ち込んだが、2022年に大きく回復して過去最高を更新しており、ガイドツーリズムが定着している。ガイドの半数近くを別荘移住者が占め、大きな担い手となっている。経済機会を得ながら地域と関わる手段として、ジオパークが移住者から受け入れられている。

多くの活動が住民の熱意と献身によって支えられている。浅間石の持続可能な利用のための調査や啓発、郷土の独特な食べ物「くろこ」の活用が進んでおり、地域協働の効果が高校連携や南麓地域との交流などに現れてきている。

一方で、住民からはジオパークの理念の難解さを指摘する声もある。この声は、普及活動が不足しているというよりも、日本特有の国内状況に起因しているように思える。すなわち、地球レベルで見れば温室効果ガスの排出量増加による環境の持続可能性が課題となっているが、地域レベルで見ると人口の減少による社会の持続可能性が大きな課題となっている。この地球レベルと地域レベルの課題意識の差が、ジオパークの難解さを指摘する声として現れているのではないかと。

当ジオパーク地域は中山間地にあり、人口の減少・流出が続いているが、そのすぐ隣にはオーバーツーリズムによる慢性的な交通渋滞に悩まされている地域がある。このような社会の構造と課題にも目を向けた活動がジオパークに期待されていると考えている。